

心理学部臨床心理学科 総合型選抜

総合型選抜 課題レポート

課題レポート問題

コロナ禍について書かれた以下の文章を読み、【設問】に答えなさい。

最初に味わってみたいと思うのはメルケル首相が、今年三月十八日に行ったテレビ演説の言葉です。これからご紹介する一文は、皆さんもドイツ大使館のホームページで読むことができます。この談話のはじめに彼女は、次のような、ある意味で意外なことを語ります。

何百万人もの方々が職場に行けず、お子さんたちは学校や保育園に通えず、劇場、映画館、店舗は閉まっています。なかでも最もつらいのはおそらく、これまで当たり前だった人と人の付き合いができなくなっていることでしょう。もちろん私たちの誰もが、このような状況では、今後どうなるのかと疑問や不安で頭がいっぱいになります。

一見何気ない言葉のように見えるかもしれませんが、しかし、あの日、先の見えない状況のなかで、この言葉を聞いた人たちには深い安堵が広がったと思うのです。彼女は国民を直接的にはげますのではなく、「不安」を共有しようとします。「誰もが」と前置きし、「疑問や不安で頭がいっぱい」だ、とメルケルがいうとき、もちろん、そこには彼女自身も含まれています。彼女は自分が抱えている不安を隠すことなく開示したのです。

この言葉はほどなく、日本語になって、インターネット上にも流れました。それを読んだときの感動を今も忘れることができません。メルケルが、決して口にしなかったのは「頑張り」という言葉です。「皆さん、頑張りましょう」「私たちはどうにかかります。頑張りましょう」と彼女はいわない。彼女は「強さ」を誇るような態度を取りません。むしろ、「弱い」、「私たちは弱い存在なのだ」ということを最初に語るのです。

彼女は、自分の「弱さ」を明らかにすることで、本当の意味で、連帯というものが生まれてくることを経験的に知っているのだと思います。それは見方を変えれば、彼女自身がそうした弱さを正直に語る人をリーダーとして選んできたということもあるのだらうと思います。

コロナ禍は、リーダーのあるべき姿を根本から変えたように思います。世界のさまざまなところで、いわゆる「メッキ」がはがれるような現象が起こっています。これまでは「強い」リーダーが発言力を高めていました。

しかし、これからは、いたずらに「強がる」リーダーではなく、真の意味で「弱さ」を受け入れることのできる「弱い」リーダーこそが、人々と深いところでつながるのではないかと思うのです。

今日、メルケルの言葉にふれながら、改めて考えてみたいのは、「つながり」という言葉です。この「つながる」という言葉は今、世界のさまざまな所で語られ始めています。やはり、コロナ禍でのリーダーシップにおいてとても優れた手腕を発揮した台湾の総統・蔡英文も、connect あるいは、connectivity という表現を用いています。

似た言葉で「交わり」という言葉もあります。「つながり」と「交わり」がどのように違うのか、そして、この言葉の差異を繊細に感じ分けつつ、世界をどのようににつくり変えていかなければならないのか、ということを考えてみたいのです。

さて、メルケルは、先の言葉のあとに、多くの人が病に感染し、そして亡くなっていくなかで、人の「いのち」をめぐる語ります。

これは、単なる抽象的な統計数値で済む話ではありません。ある人の父親であったり、祖父、母親、祖母、あるいはパートナーであったりする、実際の人間が関わってくる話なのです。そして、私たちの社会は、一つひとつの命、一人ひとりの人間が重みを持つ共同体なのです。

どの国でも感染者数は日々公表され、それを見た人々はさまざまな思いを胸に宿します。しかし、その一方で、人間の「いのち」は、けっして数量化されない何かでもあることも知っています。そして、「いのち」の次元では誰もが、尊厳を持った平等な存在であることもどこかで感じながら生きています。メルケルはそれに深い敬意を表すのです。

「敬意」は、リーダーとしてのメルケルを考えると、とても重要な言葉になるかもしれません。彼女はそれを直接語る、というよりも体現しようとしています。

また、ここでメルケルが語っている「いのち」は、身体的な「生命」と深い関係がありながらも同じものではありません。「いのち」と「生命」は、どういう関係にあるのでしょうか。「生命」がなくなれば、「いのち」も消滅するのでしょうか。

私たちの身体はしばしば目に見え、手でふれあえる、「交わり」を求めます。しかし目に見えない「つながり」を実現するのは、「生命」よりも「いのち」です。「いのち」と「いのち」がふれあったとき、私たちは「つながった」と感じるのではないのでしょうか。

また、日常生活で「交わり」のなかにいるとき、私たちはなるべく「弱さ」を隠そうとします。「強がる」ことが多いようにも思います。

そのいっぽうで、信頼できる人と「つながり」を感じるときは、安心して「弱く」あれるのではないのでしょうか。それだけでなく、弱いところを見せながらも、互いに助け合うということも起こる。人は、弱くあることによって強く「つながる」ことが少なくなるのです。

今—そしてかつて—この国ではどこかから「頑張ろう」という耳には聞こえない「声」が響いてくるように私には感じられます。みんなでもっと「強く」あろうと励まし合っているように思うこともあります。

励まし合うのはよいことなのかもしれません。しかし、それよりも弱さを互いに受け入れることが最初ではないのでしょうか。

弱さと弱さが重なっても、より弱くなるだけなのではないか、という声もどこかから聞こえてきそうです。「あたま」で考えるとそうなります。しかし、先にもふれたように私たちが、互いに内なる弱い人の姿で誰かに会う。そこには、信頼や友愛、ときには慰めがあり、あるときは孤立から救い出された心地もあるかもしれません。不思議なことなのですが、弱さによって実現した「つながり」は、私たちをより弱くするとは限らないのです。その人に眠っている可能性や生きるちからを呼び覚ますこともあるのです。

(出典：若松英輔(2020)「弱さのちから」 亜紀書房)

【設問】

筆者の述べる「弱さ」に対する考え方を、援助を必要としている人々への支援に活かすとしたら、どのように活かすことができますか。例を挙げて1200字以内で述べなさい。